

INDEX

- BIO2012 リポート
 - BioJpan2012 開催のご案内
 - 医療イノベーション 5 カ年戦略の発表
 - 平成 24 年度 蛋白質立体構造解析 NEDO 特別講座のご案内
 - 名古屋シンポジウム開催のご案内
-

■ BIO2012 リポート

バイオ・製薬業界での世界最大のイベントである BIO (Biotechnology Industry Organization) International Convention が、6 月 17 日 (日) より 6 月 21 日 (木) に渡り、米国ボストンにて開催されました。参加者は 16,505 人、65 ヶ国 (昨年は 15,626 人、65 ヶ国) で 1/3 は海外からの参加であり、2,000 を越える団体 (米国 26 州、34 ヶ国) が出展し、約 180 のセミナーが開催されました。日本からは、日本貿易振興機構 (ジェトロ) が主催する日本パビリオンが設けられ、ベンチャー企業 18 社が出展しました。JBIC 会員企業からは iPS アカデミア ジャパン、オーピーバイオフィクトリー、理研ジェネシスが参加されました。BIO は、出展している企業や団体との個別商談を進めるビジネスパートナーリングに重点を置いているのが特徴であり、展示会場の中心にパートナーリングブース (全体の 1/3 のスペース) を設け、25,291 件のミーティングがなされました (昨年は 21,183 件)。

全体的な印象ですが、今回のキーワードは” austeritiy(緊縮財政)” と” Patient (患者)” だと言えます。BIO の Keynote Luncheons では、毎年著名な政治家をゲストとして呼ぶのが恒例となっていますが (昨年はブレア英元首相、一昨年はクリントン、ブッシュ元大統領、ゴア元副大統領)、今年は過去の金融危機に対応したルービン、ポールソン元財務長官と地味でした。ヨーロッパの金融危機によりヨーロッパ各国、及び米国は緊縮財政が強いられており、医薬品や治療は公的支

出によりまかなわれる部分が多いことから、緊縮財政の下では、自ずと成長にも限界あります。従って、ブロックバスター的な新薬開発は一層困難となり、セミナーでは **Personalized Medicine**、**Orphan drug**、**neglected disease** が着目され、患者の立場に立った最適な医療及び医療費低減の重要性が議論されました。また、製薬会社は、今後の成長が見込まれるアジアやロシアなど新興マーケットを開拓するための企業買収に熱心であり、このような中で相対的に日本の位置付け向上したと言えます。

注目するセミナーをいくつか紹介します。

まずは、Francis Collins NIH 所長が NIH の新政策についてスピーチされました。**Translational Science** に重点を置き、基礎研究の成果を応用につなげるために、NIH の中に **NCATS(National Center for Advancing Translational Science)** 及び **CAN(Cures Acceleration Network)** を設け、あらゆる疾患に関する診断及び治療法の開発・検証・実施の加速や、治療法を確立することが強く望まれている分野（例えばパーキンソン病）の開発を促進するためのグラント又はマッチングファンドの交付を行う。また、NIH、アカデミア及び企業が競争ではなく共同で **Target Validation** のためのプロセス及び科学的な手法の改善を図るとともに、製薬企業が放棄した化合物を新たな治療薬として活用するためのグラントを設けるなどが示されました。このように、NIH 単独ではなく **DARPA(Defense Advanced Research Projects Agency)**、**FDA**、アカデミア及び製薬企業と積極的に連携を図ることにより、NIH の研究成果を創薬、医療に結びつけていくための新たなシステムの構築を目指しています。

知財関連のセミナーでは、**Prometheus** 社の投薬方法に関する特許および **Myriad** 社の乳がん関連遺伝子に関する特許に対する米連邦最高裁の判決が論議されました。今後、加速されると考えられる個別化医療において適切な薬剤を適切な患者に、そして投薬のモニターをすることは薬剤の有効性を担保し、無駄な投薬、副作用の回避、医療経済の効率化には不可欠と考えられますが、遺伝子や薬剤の代謝を特許とするか、或いは自然の法則であるかという論争に対し、米連邦最高裁が下した自然の法則であるという判決は患者の利益、医療研究の発展を守る判決と考えられ、特許化には自然の法則を越える特許性のある工程が必要と考えられます。

個別化医療に関するセミナーでは、患者を中心とした治療の重要性や患者の費用負担の軽減が議論され、**PCORI(Patient Centered Outcomes Research Institute)** によるインフォームド・コンセント等で患者により良い選択を下せるための **evidence-based information** の有り方についての研究など患者の立場に立った

施策や、「Block-buster Drug」による製薬企業から見た効率的な医薬品開発から、「Niche-buster Drug」による患者から見た安全性の増大、費用負担の軽減へのシフトの必要性が指摘されたのが印象的でした。

ビジネスパートナーリングでは、50人程度収容される会場で企業プレゼンが毎日開催されていました。各企業は約25分の時間でその企業の背景紹介、その企業のもつ技術、今後開発予定分野、これまでのパートナーリングの実績等の紹介を行い、プレゼン後にパートナーリングミーティングのアポをとる姿がみられました。プレゼンを実施する企業はベンチャーからメガファーマまで様々で、企業規模にかかわらず積極的にビジネスチャンスを創りだそうとする光景が印象的でした。紹介された技術としては、複数の抗原結合部位をもつ抗体作製技術やバイオテロ、インフルエンザのパンデミックに対応するための1回の接種で抗体が獲得できるワクチンの技術など様々な興味深い技術がありました。

■ BioJapan2012 開催のご案内

BioJapan2012「アジア発オープンイノベーション新時代」が、10月10日からパシフィコ横浜にて開催されます。

BioJapan2012は、アジア No.1 のオープンイノベーションイベントを目指し、ライフ（医療・創薬、医療機器、化粧品）、グリーン（バイオリファイナリー、バイオマスプラスチック、環境）、機能的食品、バイオクラスター&ベンチャーの4大テーマのもと、様々な企画ゾーンや主催者セミナーを予定しています。今年のBioJapanでは、BIO2012レポートで紹介したビジネスパートナーリングに力を入れる方針です。ウェブマッチングシステムを用いて、パートナーリングに参加している企業・団体同士が、お互いのニーズに合ったパートナーを探して、マッチング会場内でのミーティングの日程調整を簡単に行うことができます。企業だけでなく、大学等の研究室での研究成果を企業にアピールする場としても利用できますので、是非ご活用ください。

詳細については、下記のURLを参照ください。

<http://www.ics-expo.jp/biojapan/index.html>

BioJapanではJBICもブースを開設いたします。JBIC会員企業の方は、JBICの

ブースを利用して展示やミニプレゼンが可能です。詳細につきましてはJBIC
会員企業窓口の方へ別途ご案内いたしますので、是非ご利用ください。

■医療イノベーション5カ年戦略の発表

平成24年6月6日に開催された政府の第5回医療イノベーション会議に
おいて、革新的な医薬品や医療機器を生み出すための「医療イノベーション
5カ年戦略」が発表されました。

日本の医療関連分野を成長産業として位置づけ、これを発展させるために、
革新的な医薬品・医療機器の研究開発、実用化に係る施策、世界最先端の
医療の分野である再生医療および個別化医療の実用化に係る施策、医療
イノベーション推進のための横断的施策が柱となっています。

医薬品の開発支援体制の整備では、基礎研究等から医薬品の実用化まで
切れ目なく支援するためのオールジャパンでの創薬支援体制として、医薬
基盤研究所を中心に理化学研究所、産業技術総合研究所等による「創薬支援
ネットワーク」を構築し、アカデミア等における我が国の優れた研究成果を
確実に医薬品の実用化につなげたい、としています。

詳細については、下記の首相官邸のホームページを参照ください。

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/iryoku/5senryaku/index.html>

■平成24年度 蛋白質立体構造解析 NEDO 特別講座のご案内

「蛋白質立体構造解析 NEDO 特別講座」の開催についてご案内します。

本講座は、NEDOプロジェクト「生体高分子立体構造情報解析」の成果を受け、
名古屋大学、東京大学、大阪大学の3拠点が技術的に連携し、創薬に資する
基盤技術に関して人材育成を通し産業界に還元する目的で実施するものです。

【講座概要】

◎構造生物学講座（名古屋大学）

極低温電子顕微鏡による立体構造解析基礎技術、膜生物学

◎蛋白質計算科学講座（大阪大学）

計算科学による、分子シミュレーションと高分子系への展開

◎分子認識解析講座（東京大学）

生体系 NMR の基礎と応用および NMR を用いた分子間相互作用解析法

講座内容の詳細及び講座スケジュールについては、下記のホームページをご覧ください。

<http://nedo.cespi.nagoya-u.ac.jp/>

【定員】

講義定員： 50 名程度

実習定員： 8 名（申込書に基づき簡単な審査をし、可否をお知らせします）

【申込方法】

下記 URL にて随時受け付けております。

<http://nedo.cespi.nagoya-u.ac.jp/apply.html>

【参加費】

無料

【お問い合わせ】

蛋白質立体構造解析 NEDO 特別講座 事務局

info-nedo@nedo.cespi.nagoya-u.ac.jp

■ 「Nagoya Symposium Frontiers in Structural Physiology （名古屋シンポジウム）」 構造生理学最前線 開催のご案内

本シンポジウムは、G 蛋白質共役型受容体の構造解析及び G 蛋白質との複合体の解析に成功した Brian Kobilka 教授、また 2003 年にノーベル化学賞を受賞された Rod MacKinnon 教授、同じく 2003 年にノーベル化学賞を受賞された Peter Agre 教授をはじめとして、構造生理学分野における代表的な研究者（海外 22 名、国内 9 名）をお招きしてご講演いただきます。

また、ポスター発表による意見交換の場も設けております。このような世界をリードする研究者が一堂に会する機会にはありませんので、奮ってご参加ください。

主催：名古屋大学細胞生理学研究センター(CeSPI)

共催：独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)

後援：日本電子株式会社 (JEOL)

日時：2013年1月22日(火) - 24日(木)

場所：名古屋大学豊田講堂

参加費：無料

申込締切：2012年11月30日(金)

プログラム、申込方法等の詳細は下記をご覧ください。

<http://symposium.cespi.nagoya-u.ac.jp/>

【お問い合わせ】

名古屋シンポジウム事務局

sp.hotta@cespi.nagoya-u.ac.jp

TEL：052-747-6794

=====

●JBICに関するご意見、ご質問、お問い合わせはこちらから。

<https://www.jbic.or.jp/roku/voicebox/input.html>

=====

●配信中止、変更はこちらから。

https://www.jbic.or.jp/roku/m_chushi/input_ch.html

=====

●発行：一般社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム

JBIC めるまが編集部 <http://www.jbic.or.jp/>

=====

Copyright(c) 2012 JBIC. ALL rights reserved.